

古い友人と出会う

言葉をかけてくれて、ほんとに有難う。君がもし持ち前のハニカミから、僕が君の前を通りすぎるのを黙って見逃してしまっていたら、折角のまれな機会が生きなかつたろう。

実のところ、僕は君のことは忘れていた。呼びとめられて、呼びとめている君の顔をまじまじと眺めてみたが、こう、すぐにはどのどなたで、この僕とどんな関係の人か全く思い出せなかつた。思い出せなかつたまま、これはしばらく、とは言ってみたが、あとが心配だつた。

しかし、君が急に早口にいろいろなことをしゃべり出したから、有難かつた。君の頭の中から足元まで一通り目をくれる間に、君がどのどなたか見当がついた。だから僕は思わず、やあ、見違えるほどキレイになつたねえ、などと言つたわけだ。そしたら君、だつてあの頃はお化粧などしたことなかつたもんね。そうだつたね、皆いつも着た切り雀で、コツペパンばかり食べていて、それにコロッケを挟むとぜいたくだったり、おしやれと言えば床屋に行くこと位の時代だつたもんね。

いま、何してんのと聞いたたら、ちよつと威張つた顔付きで奥様稼業よ、ときたね。でもその言い切り方がとてもよかつた。どこに住んでんのと聞いたたら、北区よ、と言うから、ああ静かないところだね、と言つたら、何言つてんの、工場の真ん中よ、ときた。そうだつたねえ。うるさい、くたびれた、灰色の街だつたね、北区というところは。

やつと彼に食べさせて貰えるようになったわ、と言つていたね。そりゃほんとに結構だ。さあ、これで有り金ぜんぶよ、あと五〇円。とか何とか言つて、いつも底ぬけに明るかつた君がうらやましかつた頃を思い出す。

そしてその頃、君が僕に好意を待っているという甘ずっぱい噂が春の風のように吹きわたり始めたことも、ついでに思い出す。噂は所詮噂であつて、それ以上のものではなかつたが、別に苦の種にもならなかつた。何しろおたがいすごく若くて、未来にでつかい夢を持っていたから、いろいろなもの失われるのがそれほど苦にならなかつた時代だつたもんね。もつとハッキリ言えば、男だとか女だとかという分けへだてを、まだ余り感じなかつたように思うよ。

だから、君が派手なドレスなど着て、頭を丹念にウェーブさせて、化粧した顔で間近に立たれたりすると、全くどうも君が君でない感じがしてならないわけだ。いやそれもこれもすべて時の流れさ。人生という大河に、時々よりそつて流れるが、また離ればなれになる。そして時々大きな曲がり角で再び流れのなかで顔を合わせることもある。君がやがて母になり老婆になつていくとき、この僕は一体どうなつていいのか。

あなたも早く結婚しなさいよ、いいもんよ、二人の暮らして。と君は言つてくれたが、それを言葉通り受けとる程、若い身空ではなくなつた。もちろん、結婚に多くの願いをかけてはいるが、結婚したら万事バラ色などという信仰はもう卒業した。結婚が人生の目的みたいな誇張のほども分つてきた。

だからさ、ね、君。別れの言葉はもつと別のがよかったね。君は昔よく言ってくれたじゃないか。あなたはいつも人生を深いところで生きている人ねって。だから今日も、がんばってね、あなたはきつと大きな仕事をする人になるわよ。とか言ってくれていたら、そしたら、僕は完全無欠に今日の出会いを嬉しく思ったと思うよ。

(一九五七・五)